

亞宗教

オカルト、スピリチュアル、
疑似科学から陰謀論まで

中村圭志

Nakamura Keishi

インターナショナル新書 121

目次

序 章 宗教と科学の混ざりもの

奇妙な信念の系譜／「亜宗教」とはなにか？／裏の思想史

第1部 西洋と日本の心靈ブーム 19↓20世紀

第1章 一九〇—一〇世紀初頭の心靈主義

コナン・ドイルも認めた真正の妖精写真？／ガードナーの妖精理論／一九世紀の心靈ブーム——靈媒の出し物／エンタメか、信仰か／心靈現象のバリエーション／心靈主義台頭の背景——科学の勃興と宗教の弱体化／心の空白を埋めるもの／唯物論に反対して

コラム① 心靈の使い手たち

第2章 コツクリさんと井上円了の『妖怪学講義』

テーブルターニングからコツクリさんへ／明治版コツクリさんのやり方／死者の靈か狐・狸か？／日本のアニミズムの世界／昭和期のコツクリさん
コラム② 井上円了と『妖怪学講義』

第3章 動物磁気、骨相学、催眠術——一九世紀の（疑似）科学

動物磁気とはなにか？／動物磁気、メスマリズムと催眠術／磁気から心理へ／心という最後の開拓地／二〇世紀に続く疑似科学の系譜

コラム③ 動物磁気、骨相学、同種療法、水療法

第4章 明治末の千里眼ブームと新宗教の動向

千里眼ブーム／御船千鶴子の場合／透視実験／実験の信憑性／不幸な結末／長尾郁子の念写／疑惑と混乱／日本における心靈主義の影響——一般社会と新宗教／心靈主義と保守的思想

コラム④ 大本とその周辺——出口ナオ、出口玉仁三郎、浅野和三郎、谷口雅春

補 章 伝統宗教のマジカル思考

伝統宗教もまたマジカルである／伝統宗教と亞宗教の比較／来世觀について／終末意識について

第2部 アメリカ発の覚醒ブーム 20→21世紀

第5章 ファンダメンタリストとモンキー裁判

ダーウィニズムの出現と進化主義の時代／『創世記』VS『種の起源』／ダロー VS ブライアン／神が止めたのは太陽か？ 地球か？／なぜ進化論を目の敵とするのか？／進化論の誤読／感情的に見合うものを見る／ハリケーンはボーイング747を組みあげられるか？／クレーンとスカイフック

コラム⑤ ファンダメンタリストとベンテコステ運動

UFOの時代——空飛ぶ円盤から異星人による誘拐まで

戦後のアメリカ社会が生み出したUFO言説／ケネス・アーノルド事件／「空飛ぶ円盤」の語源／平和の使者か、侵略者か／ヒル夫妻誘拐事件／なぜ人は異星人に誘拐されたと思うのか？／アブダクションとアイデンティティ／異星人による法悦
コラム⑥ レ・フェステインガー『予言がはずれるとき』

第7章

ニューエイジ、カスタネダ、オウム真理教事件

ニューエイジとはなにか？／カウンターカルチャーと「意識の変革」／政治運動からサブカルチャーハー／ビー・ヒア・ナウ／ハーバード大教授からニュー・エイジのグル／カルロス・カスター／マジックのレトリック／超常現象問答①／超常現象問答②／優れた宗教的テキスト？／マジック文化の帰結／オカルトからカルトへ
コラム⑦ 真逆を行った二人のユダヤ人——ラム・ダスとウディ・アレン

科学か疑似科学か？——ESP、共時性から臨死体験まで

超心理学とガンツフェルト実験／テレパシー実験への疑惑／抑圧された記憶／共時性（シンクロニシティ）／ユングのオカルト性／理系と文系の本質的差異／文理のキメラ的融合／ソーカル事件／事実と解釈／臨死体験言説／日米の思い入れの差／類似の効用と曖昧性

コラム⑧ 神秘思想を比較する？——井筒俊彦『コスマスとアンチコスマス』

終章 陰謀論か無神論か？ 宗教と亞宗教のゆくえ

二〇世紀の諸言説の陰謀論的傾向／レプティリアンの陰謀／Qアノンの幻魔大戦／陰謀論の時代？／無神論の時代？／無神論は（亞）宗教か？／伝統宗教の偏見／「不信」という信仰

参考文献

序章 宗教と科学の混ざりもの

奇妙な信念の系譜

昨今、話題となつてゐるもの一つに陰謀論がある。二〇一七年にアメリカ大統領に就任したドナルド・特朗普は事実か確証のないツイートをするのに余念がなかつた。また、彼の任期には荒唐無稽でゲーム感覚でもあるような「Qアノン」なる陰謀論が、一部の人々の間で熱心に信仰された。二〇二〇年に特朗普が選挙に負けると、翌年、これを陰謀と見る者たちが連邦議会議事堂を占拠し、人々を驚愕させた。地球温暖化否定論や反ワクチン運動もまたおおいに流行したが、これらもまた概ねは陰謀論であり、疑似科学である。全体として、事実よりも信念あるいは宣伝・広告のほうを言う時代が来てしまつた感がある。

振り返れば一九七〇～九〇年代にも、非科学的な言説が世の中に流通していた。オカルト番組は多かつたし、ポストモダンの評論にはスピリチュアルな疑似科学が入り混じっていた。世界的に中産階級が拡大しつつあつたこの時代、いまよりも明るい調子で、庶民も評論家もみな

けつこう「知の冒険」的な言葉のマジックを楽しんでいたのである。少なくとも、現代と比べて昔が知的な時代であつたわけではないのだ。

本書は政治闘争や社会構造を分析するものではなく、私もその方面の専門家ではない。私にできることは、時代をさかのぼつて奇妙な信念をめぐる小旅行をおこない、いまという時代を俯瞰してみるよう、読者をお誘いすることである。荒唐無稽な信念、疑似科学的な言説なるものは昔から繰り返し世に現れた。一九世紀、二〇世紀と続くそれらの系譜上に二一世紀の知的状況があるのだ。

本書では、近現代に生まれた非科学的で宗教めいた信念や言説を便宜的に「亜宗教」と呼ぶことにする。取り上げるのは、一九世紀の心靈主義とその周辺、二〇世紀の右翼的亜宗教の代表としてのファンダメンタリストの反進化論、左翼的亜宗教の代表であるニューエイジの覺醒運動とポストモダン言説、そしてS.F.がカルト化したような異星人信仰系のUFO言説などである。

これらはすべて何らかの意味で現代の陰謀論や疑似科学の先駆けである。死者の靈の存在を信じる心靈主義者の言つていることは、現代ではひどく素朴に聞こえる。しかし、じつは彼らのロジックと同じものが現代にも繰り返し現れている。反科学的なファンダメンタリストには「民衆の擁護」という大義があり、その情念は現代の特朗普主義者に受け継がれている。二

ユーロイジやポストモダンの時代には、左翼の立場から「科学的事実は相対的なものだ」という言説が流行しており、二一世紀には右翼の立場で同じようなことが言われるようになつた。UFO信仰は特異なカルトのようだが、現代の陰謀論の原型でもある。

昔の流行現象は珍妙にも思えるが、現代のわれわれだって多少話を複雑化しているだけで、やつていていることにさしたる進歩はない。だから、一九世紀の千里眼騒動からも、二〇世紀初頭の進化論裁判からも、二〇世紀後半のヒッピー文化や、観念的な言葉に溺れて自滅したポストモダン言説からも、教訓を得ることができる。

歴史旅行を楽しみながら、これをやつてみようというのが、本書の試みである。

「亞宗教」とはなにか？

いま述べたように、「亞宗教」というのは私が便宜的に与えた呼称で、宗教によく似ているが、伝統的な意味での宗教そのものではないような現象あるいは言説のことだ。

伝統的な「宗教」は概ね、①神仏や先祖の靈や精霊などの超越的な存在を信じる、②マジカルで奇跡的な出来事を信じる、③信者たちは人生の意味や救いを感じる、④そうした世界觀を通じて信者たちの間に規律や連帯感が生まれる、などの特徴をもつてゐる。

「宗教」ごとにスタイルや強調点が異なり、キリスト教では①の神の神学を非常に重んじ、日

本の新宗教などでは②の病気治療などを強調し、仏教では③の悟りや安心立命などを強調し、イスラム教では④のイスラム法に基づく社会秩序を強調する。

本書で取り上げる「亞宗教」の一群は、半ば「宗教」に似ている。心靈主義では死者の靈を信じる。UFO言説に出てくる異星人は神に似ており、UFOの動きはしばしば奇跡的だ。進化論を否定する一派は聖書に根拠を求める。ニューエイジは仏教の悟りに似た覺醒を信じるので、しばしば占いや易や転生などを信じる。いわゆる陰謀論はひどく否定的な信仰だが、信奉者たちは自分たちが真理の守り手だと信じており、集団的に振る舞う。

しかし、それらにおいて伝統的な「宗教」のスタイルはだいぶ崩れている。心靈主義は来世観はもつていて、神の存在はどうも希薄だ。UFO信仰は確固とした礼拝の儀式をもつているわけではない。反進化論の保守勢力はアメリカ愛国主義に走っている。ニューエイジはさまざまな信仰の盛り合わせで、相互に矛盾しているが、あまり気にしていないようだ。陰謀論者は時とともに教義をどんどん増殖させていく。

また、「科学」的であることを標榜するのも、伝統的な「宗教」と異なる「亞宗教」の特徴だ。心靈主義者は心靈写真などのエビデンス(?)をもつて幽靈の実在が実証(！)されたとしばしば主張した。UFOを異星人のスペースクラフトと信じるのは信仰めいているが、当人たちにとつてはあくまで科学的事実性の問題だ。反進化論は、当事者にとつては進化論以上に

正統的な「科学」だ。ニューエイジはニューサイエンスなどの疑似科学的主張と結びついており、ポストモダンと呼ばれる人文・社会科学系の言説とも相性がいい。温暖化などを否定する陰謀論者は、独自の科学的推理を働かせることで、世界中の科学者とは正反対の結論に達している。

基本的に、一八世紀以来の自然科学や考古学や歴史学などの急速な発展により、伝統的な宗教の教えや実践にさまざまな疑問符が付されるようになり、一九世紀には少なくとも先進国において宗教の威信が大幅に低減した。宗教離れした人々の多くは、自然科学系の冷徹な合理主義だけで人生を組み立てることに自信が持てなかつた。たとえば宗教とともに来世の永生^(えいせい)が消えてしまうのは寂しかつた。宗教の提供物であつた集団的規律が失われるのを危惧した者たちもいる。二〇世紀には戦争、冷戦、格差、環境問題など、新しい危機が次々と生まれたが、これを乗り越えるために新たな宗教的覚醒が必要だと考えた者たちもいる。

人間はなにかを信じていたい生き物である。宗教の権威を頼れなくなつた人間の心の空白には、疑似科学やナショナリズム的な偽史、異星人から陰謀的な幻魔大戦のドラマまで、なんでも棲みつくようになつた。

かくして生まれたポスト宗教時代における、試行錯誤的な宗教風の運動や言説が「亜宗教」だというふうに、とりあえず見積もることができる。そして政治的な保守・リベラルの対立や

経済的な階級的対立がこれに絡んで、相互に影響を与え、構図をややこしくしてきた。

本書では、ナチスなど枢軸国の幻想やナショナリズムをめぐる神話についてはあまり触れていない。いわゆる新宗教についても、いくつかのものに触れただけである。政治方面や新宗教方面はたしかに大事だが、それらにまで手を広げると、到底新書一冊ではカバーできなくなる。それに、ナショナリズムや新宗教については、一般向けの解説書も豊富だ。

裏の思想史

本書の各章は相互にゆるやかに連関している。全体を読まると、ある程度の話の流れが見えてくるだろう。人間はいつでも個人的に思索をおこなっているが、たいていそうした考えは夢想的なもので、それがしかるべきチエツクを受けることなく社会に出てくれば、疑似科学やオカルトになる。そのうちのいくつかはブームを呼び、「新時代がはじまつた」と喧伝されるが、やがてマンネリ化し、勢力を失っていく。

亜宗教が人類の知恵の発展に積極的に寄与することは概ねないと言えるだろうが、しかし、人類思想史の裏面を教えてくれるという意味で、貴重な情報アーカイブとなっているのである。今日あなたが目にしている、あるいは思いついてしまった亜宗教には、似たような先例がある。だから一〇〇年以上前の交霊術や千里眼の歴史を知ることにはおおいに意義があるはずだ。

本書では、亞宗教的な言説の鳥瞰図を得ることを目標としているが、オカルト的な主張に対しては基本的に「それが眞実である蓋然性は限りなく低い」という立場で扱っている。

それは、そうした現象のブームが歴史的に一過性のものであり、長い歴史のなかで万人に納得のいく形で実証された内容を概ね含まないからである。これらの亞宗教は、その時々の社会心理や諸々のイデオロギーとの関数だと割り切つたほうがずっと筋が通る。

現代の科学や通説がすべてではないが、そのことは亞宗教的な言説の価値を少しも高めない。非常識なことが起きたことを実証しなければならないのは、主張する側であり、主張を聞かされる側ではない。

なお、私は欧米の乙世代がどんどん無宗教化・無神論化していることを興味深く感じている。一〇年もすれば、二〇世紀的な亞宗教をめぐる社会の構図も——政治の構図と同様に——様変わりするのではないか。人間性のなかの不合理なものと合理的なものとは、次世代においてはどうのような布置になるのだろうか？

読者にもそういった視点で、知識の変動の著しい現代という時代眺めていただければと願っている。



0-1 亞宗教の系譜

**亜宗教 オカルト、スピリチュアル、疑似科学から陰謀論まで
中村圭志**

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 價：1,056 円 (10% 税込)

発売日：2023 年 4 月 7 日

I S B N：978-4-7976-8121-5

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)